



いじめを 解決するための 大人の役割（後編）

長田 清 おきなわCAPセンター代表理事
長田クリニック（心療内科）院長

前号から引き続きまして、去る6月15日（日）那覇市てんぶす館テンプスホールにて行われた講演会「いじめを解決するための大人の役割」をお伝えします。今回は、後半編です。

次に、イギリスのいじめ防止対策のやり方のビデオを見てください。スー・ヤン（スクールコンサルタント）の「誰も責めないサポートグループ」という方法です。

【ビデオ始まり】 （ナレーション）

どんなに体制が整っていても、あらゆる学校においてなんらかのいじめは起きます。このビデオでは学校でのいじめを減らすのに役立つプロセスと特殊なテクニックを段階的に紹介します。

学校でいじめが起きると、その状況に怒りを覚えます。教師や親は怒り、被害者を守りたい、彼らを助けたい、いじめた子どもを罰したい、2度と起こらないようにしたいと思うでしょう。しかし、経験からすると、罰することは良い戦略とは言えません。罰することで、こういった行動を改善し、長期間それを保つことは難しいでしょう。

グループの中にはひとりふたりはいじめっ子がいるでしょう。こうした子どもは自分の立場や力を誇示しようとしているのです。しかし、何人かは共謀していたり、今回は自分じゃなくて良かったと感じた後にいじめに参加している子どもを見かけます。被害者がどう感じているのかを受け止め、その感情をグループに伝え、被害者が体験している痛みに驚き、いじめをやめさせる良いアイデアを思いつくことができます。このビデオで、いじめが起きた後、子どもたちと接するカウ

ンセラーの様子をお見せします。最初に彼女は被害者に話を聞き、それからグループに対して7つのステップを踏んでいきます。それは、いじめに関わったグループメンバーのいじめ行為を止めるような効果があるのです。

強調しておきたい大事なことの一つは、いじめの真相を深く追求しなくても良いということです。カウンセラーはだれが、何を、いつ、なぜしたかを知りたいと思いますが、これではいじめの対処がなされず、焦点がずれてしまう典型的なケースといえます。

このビデオで紹介するやり方を使えば、行動を真に変えることができると心から思っています。

（カウンセラー）マイケル来てくれてありがとう。来てもらったのは、今朝、君のお父さんから電話があって、「あまり良くない状況だ」と話してくれたからなの。今朝学校に来るときは、どんな気持ちだった？

（マイケル）怖くてすごく緊張したよ。今でもある場所は避けています。屋上には絶対に行きたくないし、だからお父さんに頼んで僕を校内まで連れてきてもらっています。

（カウンセラー）それで逃げ道を探して、対処しようとしているのね。

（マイケル）はい。

（カウンセラー）家でも何か影響が出ているの？

（マイケル）あんまりないけど、でも、2階の寝

室で泣いてばかりいます。それを兄さんに見つかったけど、怖いから、こんな状態になったわけを言えなくて…。

（カウンセラー）それで学校に来なくてすむような手立てを考えたのね。

（マイケル）そう。

（カウンセラー）それで、お母さんにはまだ説明できていないのね。

（マイケル）ええ。お母さんは僕が学校で心配ごとを抱えていると思っています。僕の様子を見ればわかるんだと思います

（カウンセラー）このことについて誰か友だちに話したことはある？

（マイケル）ひとりか、ふたり…。

（カウンセラー）何か方法を教えてくれた？

（マイケル）はい。先生に会って話をしてみろって。でも、話したとしても彼らは僕をからかい続けて、もっとひどくなるんじゃないかと心配なんだ。

（カウンセラー）私は彼らにマイケルの気持ちを話したいんだけど、かまわない？

（マイケル）うん…、でも、そんなことをしたら、僕のことをぶちのめしたり、もっと嫌がらせをしてくるんじゃないかな。

（カウンセラー）心配しなくてもいいのよ、マイケル。彼らに罰を与えるつもりはないから。彼らも君の気持ちを知る必要があると思うの。こんな方法はどうかしら？君がどんな気持ちなのか、詩を書くか、絵を描くか、文章を書いてくれると、私が彼らに会ったとき、君の気持ちを伝えられると思うけど。それで、彼らが叱られて大変なことになるんじゃないかと心配することはないのよ。こういったことは、彼らにもよくないことだと、わかってほしいし、君にも学校が今よりもっと楽しい時間になるように彼らに協力してほしいからなの。だから、君も私を助けてくれるかしら。

（マイケル）いいよ。

（カウンセラー）絵か、詩をかいてくれるかな。

（マイケル）はい。

（カウンセラー）詩を書いてみる？

（マイケル）はい。

（カウンセラー）じゃあ、今晚気持ちを詩に書いて、明日の朝、持ってきてくれる？明日それを彼らに見せることにします。それでいいかしら？

（マイケル）はい。

（カウンセラー）マイケル、来てくれてありがとう。



（ナレーション）

カウンセラーは関わった生徒たちとのミーティングを設定します。6～8人が理想的です。グループには傍観者や周囲でいじめに加担した共謀者も含まれます。被害者がどんな気持ちなのか、詩や文章や被害者の苦痛を表現した絵などを使って始めます。出来事についての詳しい話は一切せず、グループを非難することもしません。

（カウンセラー）みんな来てくれてありがとう。マイケルから、今学校を楽しめていないという話を聞きました。学校に来ることがとても怖いという話をしてくれたの。学校が始まったころは一人で歩いてくるのが楽しかったのに、今はとても怖くてお父さんに連れて来てもらっているそうです。

それと、屋上はみんなで遊ぶ場所なのに、そこに行くのを避けて気分がすぐれず怯えています。また、昨晚も泣いたそうですが、お母さんやお父さんに話をするのを心配しています。というのは、そんなことを言ってしまったら、両親にどんな影響を及ぼすか、両親がどうするかわからないからです。マイケルは自分の気持ちを詩にしました。

誰かを非難しているわけではありません。誰かが問題になることもありません。ただ、グループとして何かができると考えているのです。

みんな、何かいいアイデアがあるんじゃないかな。マイケルがよりよい状態になれる方法を考えましょう。

（子ども）マイケルがそんなにひどいって知らなかった。彼に謝らなきゃ。

（子ども）お菓子を彼にあげてもいいよ。

（カウンセラー）彼はきっと喜ぶわね。

（子ども）僕は友だちに彼を困らせたり、いじめたりしないよう話してみるよ。

（子ども）僕は学校から家まで毎日一緒に帰ることができると思う。

（子ども）僕は運動場で彼を仲間に入れて、ゲームに誘ってみる。

（カウンセラー）はい、素晴らしいアイデアがたくさんできましたね。あとはみんなに任せてこれで終わりにしたいと思います。マイケルの様子がどうなったか、来週もう一度みんなに会いたいと思います。

～1週間後～

（カウンセラー）前回話をして以来、どんな様子ですか？

（子ども）僕はマイケルにごめんなさいと言いました。でも、その後、マイケルの気持ちを思うと、本気で悪いことをしたなと思ったんです。

（子ども）僕は友だちがマイケルに嫌がらせをしているとき、やめるように言いました。

（子ども）最初の2、3日マイケルを運動場に誘いました。彼はとても不安がっていたけど、一緒にサッカーをしました。でも、その2、3日後には別の生徒ともサッカーをしていました。屋上に誘わなくてもよくなり、もう彼は怖がりません。

（子ども）ここ2、3日はマイケルと一緒に学校まで歩いています。そして、屋上に行く恐怖感も薄れてきたように思います。

（子ども）僕はマイケルが屋上にいるのを見たよ。お菓子をあげたら、翌日彼も僕にお菓子をくれたんだ。彼はもう大丈夫なの？

～マイケルと～

（カウンセラー）マイケル、前回あなたとみんなでお話をしてから、1週間が経ちます。どんな変化があったか聞かせてもらえます？

（マイケル）何人かがお菓子をくれました。あれ以来、何度も運動場でサッカーをしました。とてもいい感じです。彼らのことがずっと好きになりました。

（カウンセラー）では先週より状況はずっと良くなったのね。

（マイケル）はい、とっても。誰にもいじめられなくなったんだ。結構安心できるし、学校に歩いて行くのも楽しいです。友だちもいるし、ずっと安心できるよ。

【子どもたちの感想】

（カウンセラー役）今日、学校でのいじめにどう対応するかについての演技をととても一生懸命やってくれましたね。そこで、みなさんに出演者とし

てではなく実際の生徒としてこの対応法についてどう感じたか聞かせてもらいたいと思います。誰かそれについて感想はありますか？

（子ども）罰せられなかったことに驚いています。でも、それはいじめを明かさずに問題を解決できる唯一のやり方だと思います。

（カウンセラー役）はいそうですね。

（子ども）はじめは何かしようとは思わなかったけど、ほかのみんなが始めたのでつられました。

（子ども）ミーティングが始まったとき、叱られるんだと思いました。全く協力する気はなかったけど、僕らが問題になっているわけでも叱られるわけでもないんだとわかったら、精一杯助ける気になりました。このやり方は気に入りました。

（カウンセラー役）その点について話をもどしてもいいかな。実際に何が起こったのか、実際にいじめがどんなことだったのかを知るのがとても大事だと思ったのね？

（子ども）はい。

（カウンセラー役）でも、もし私がマイケルに何が起きたのか聞いてから、みんなのところに来て、こんなことやったのね、あんなこともやったのね、やったのはみんなだってマイケルが言っていたわよ、と言っていたら、どうなっていたかしら？

（子ども）それは一人の見方であって、ほかの見方ではないから不公平になると思います。

（カウンセラー役）では、その違う見方の話をしたら？違うよ、先生、僕はやっていないよって言ったらどお？

（子ども）でも、先生はそれは嘘だっていうよ。だって、向こうの味方だから。

（ナレーション）

みなさんにご覧いただいたのは、単なる理論ではありません。これは様々な学校で先生方が使っている実践的なアプローチであり、その実績が報告されています。

最後に、いくつか強調しておきたいことがあります。それは、このプロセスを踏んだ後に、生徒たちに話を聞いてみてよくわかったことです。

一つ目は、彼らは自分たちが罰せられなかったことに驚きました。そして、緊張がほぐれ、罰せられる心配がなくなると、被害者がどんな気持ちでいるのか認識でき、問題解決へのアプローチへと進んでいったということです。

二つ目は、被害者に何か違うことをするようにと頼まないことです。被害者がもっと強くてやり



返せて事態を変えられるような子なら、すでに私たちのサポートなしでやっているだろうからです。被害者に自分で変えるよう求めると、より無力さを感じさせることになるだけです。

最後に大事なことは、なぜという質問はしないことです。なぜそうしたの?という質問です。子どもはよく自分でもなぜなのか分からないまま行動します。まして、周りや自分自身も説明ができません。

このビデオが皆さんのお役に立つことを願っています。共感性を高めるほうが、権力や罰を使うより、うまくいくと思っています。

【ビデオ終わり】

7つのステップ

私は2年前にこのビデオを見て、強い感動を覚えました。振り返りながら、詳しく見てみましょう。

これは、7つのステップでやっています。まず被害者と話して、ミーティングをして問題を彼らに話して、彼らと任務を共有して、彼らからアイデアを募って、行動は彼らに任せて、最終チェックをするということです。これは、加害者に「いじめ」というレッテルを貼らないというやり方です。被害者、加害者という関係を作らない。それがとても新鮮です。

《ステップ1:被害者と話す》

まず、カウンセラーに親から連絡があったら、その家庭に行って親と話をします。それで、子どもがどう感じているのか、ということを知ります。いじめがあって、その近くにだれがいるのか。傍観者はだれか。いじめが解決したときに仲良くなりたいと思っている子はだれなのか。この子の周りでサポートしてくれそうな子も聞いておきます。

《ステップ2:関係者を集めてミーティングをもつ》

そして、関係者を集めます。面接の中で出てき

たいじている子と、その周辺にいる傍観者です。子どもたちは理由が分からないので、やってきます。そして、集まってきてくれたことに感謝します。

それから、みんなに、「どうかな?これまで学校で嫌なことなかった?いじめられたり、嫌なことされたりしたことなかった?」というようなそれぞれの体験を聞きます。そうすると、みんなは「こんなこと嫌だったよ」「先輩からこんないじめを受けたよね」という話をするわけです。このメンバーの構成というのは、いじめをした人が一人か二人、傍観者、この彼（いじめられている人）のサポートをしてくれそうな人を入れてほしい6人くらいを集めて、ミーティングをします。

《ステップ3:問題を説明する》

例えば、いじめを受けている子どもをメアリーという女の子だとします。「みんなメアリーを知っている?」と話しかけます。メアリーは学校で嫌なことがあって、今幸せではないんだよ。そのことに気付いている?と切り出します。ここでは、いじめという言葉は使いません。嫌なことがあって、というふうに言います。それで、加害者に対しても、「あなたがいじめているんだよ」ということも言いません。ただ、「メアリーが苦しんでいるんだよ」と伝えます。すると、みんなは「気づいているよ、なんだか元気そうではないね」と言います。「どんなところからメアリーが楽しそうじゃないとわかるの?」と聞くと、「だってお昼一人だし、帰るとき寂しそうだから」「運動場でも一人だし」などと答えます。

《ステップ4:任務を共有する》

そこで、このグループの目的をはっきりさせます。

①誰も問題ではないし、罰を与えられることはない。

②メアリーが楽しく安全に過ごせるように助ける。

それがこのグループの共同任務であるということです。このミーティングの目的は、メアリーの問題を解決するための手助けをしようということです。

《ステップ5:メンバーからアイデアを募る》

それから、メンバーから「どうしたらいい?」というアイデアを聞くわけです。

では、「メアリーが楽しそうではないので、誰かサポーターになってくれる人いる?」と聞くと、最初はだれも「やるよ」とは言ってくれませんが、待っているとボランティアが出てきます。「ああ、よく言ってくれたわね。他のお友だちを助けるって

いいことよね。じゃあ、メアリーの支えになってあげるってどんなことができるの？」と聞きます。そして、子どもの言うことをより具体化します。

例えば、「お昼御飯を一緒に食べるよ」と言ったら、「では、それ以外の時間に彼女と一緒に過ごす人はだれかな？」と具体的な行動にしていきます。

《ステップ6:メンバーに任せる》

メンバーは普通メアリーが苦しんでいるという話を聞いて、純粹に心を痛めています。それと同時に、自分が問題なのではないとわかって安心します。誰も窮地に追い込まれることなく、グループの力はいじめっ子リーダーから共同体仲間へと変わっていきます。後はメンバーに任せます。

ミーティングは長くても30分。終わるころには、みんなが何らかの形でメアリーをサポートするボランティアになっています。ミーティングの終わりまでにボランティアにならなくてもプレッシャーはかけません。何かしろと強制しません。加害者でもボランティアをする人もいます。ミーティングが終わる際に「では、これをやってね。来週会いましょう」と言います。ミーティングの終わりにファシリテーター（カウンセラー）は問題解決の任務をグループに預けます。経過を話し合うために次の面接を設定します。

一週間も待たずに、メアリーに大きな変化が起こります。2、3日以内にメアリーに直接電話して、どんなふうになっているか、何が良くなっているかを聞きます。すると、学校に行っていて、お母さんも喜んでます。変化は急速に起こります。ほとんど2週間で解決します。

とはいっても、学校からいじめがなくなることはありません。大切なことは、メアリーが元気になっていることです。

《ステップ7:メンバーと再会する》

それから、メンバーと再会します。この一週間後の面会を約束しておくことで、いじめをモニタリングする意識づけになるし、メンバーは任務を継続する動機づけになります。また、個別面会にすることで、メンバー間の競合的な雰囲気をおおらずに、それぞれのやってきたことについて話すことが可能になります。

最初はグループで聴いて、最後の面接は一人一人に聴いていました。経過については、全員がアイデアを実行しているかどうかは問題ではなく、いじめがストップしてさえすれば良いとします。被害者が学校の人気者になる必要はなく、



あくまで安全で楽しく過ごしていればいいのです。

このやり方の素晴らしいところは加害者にいじめのレッテルを貼らないということです。いじめの被害者・加害者という関係を作ると、そこから抜け出すのは大変なことだからです。とても素晴らしいやり方ですね。

さて、いじめについて、イギリスの話と、その前に私の事例も話しました。いろんないじめがあるので、これ一つで解決できるわけではなくて、100やり方があれば、そのうちの一つのやり方だと思います。でも、このやり方も良いところがたくさんあると思います。

成長するチャンス

解決志向アプローチの考え方というのは、問題を見ない、問題を直そうとしない、良いところを探していく、ということです。問題行動に出会ったら、最高のチャンスというふうに考えてください。相手がその問題を出してくれてくれたから、教育するチャンスだし、自分が学ぶ、成長するチャンスでもあるわけです。だから、困った問題を引き起こされたと嘆くのではなく、この問題を一緒に乗り越えていくと自分も成長するんだ、と。

そして、問題に焦点はあてず、相手が努力しているところ、少しでもましなところを探して行って、それを誉めていく。そうやって、相手が自信をつけることによって、その問題から自立していくというところを応援するということです。

大人の役割は、子どもたちの間に入って何かを裁くということではありません。子どもたちの持っている良い力、強みを引き出してあげること、すなわちエンパワメントすることだと思います。

おわり